



# 中国に魅せられて

## 平沼鉱子

墳から出土したものにローマ大帝国の古銭等が展示されていた。更に当時の花やお菓子が展んでいる。乾燥がはげしいから花などは簡単にドライフラワーとなるのだろう。お菓子もカチカチの干菓子となつて展示されてあつた。

**張寒** - 前漢（前二〇二一後八）の時代、武帝の

時に西域に使いし匈奴に捕へられ、十一年の間捕囚の身となる。後、大月氏（中央アジアに拠つたイラン系の民族）に達し、紀元前一二六年、十三年目に故郷に帰る。再びイリ地方の烏孫と結びこれよ

り漢と西域諸国との交流の道が開ける。

前一四年没）

一枚の興味深い絵があつた。奴隸の値段である。絹一巻（長さはわからないが多分衣服一枚作る位ではないだろうか）プラス馬一匹イコール男の奴隸五人である。何が安いと云う前に奴隸は人間である。その人間が品物となると云う事は征服者と敗北者との差をまさざまと見せつける心の痛む絵であつた。

ガラスは宋の時代にすでに製造され使用していた。並んでいる食器の中に古代、日本に渡来したものと同じものもあつた。隣りの展示室は小数民族の部屋である。生活必需品や生活様式、パオの模型があり内部が見られるようになつていて。小数民族のそれぞれ独自の生活が一目でわかるようになっている。同じようでも少しづつ民族によって好む色とか器物の置き方、飾り方などが違う。

ウルムチに西域戸護がおかれた張騫が二回、部下が一回ここに来ている。漢代の文書がローラン故城、ミーラン故城から出土している。アスター古墳から出土した錦にブトウ文様が織られている。同じくアスター古

ウイグル族	五十七万人
ウズベク族	十二万人
キルギス族	二万六千人
蒙古族	十一万七千人
タタール族	四千百人

カザフ族（ハザック族）九十万人
ロシア族
ダクル族
三千四百人

満州族	九千人
シボ族	一万七千人
ダクル族	二千六百人
三千四百人	四千百人

が住むこのうちタタール族はイリ地方に多く住みヨーロッパ人に近い生活をしている。スマックや飾りのついたドレスなど現代風の衣服である。カザフ族は北方に住みロシヤ族はイリ、アルタイ地方に住む。シボ族もイリ地方に多く住み弓を好む。弓の選手は殆んどシボ族自身でありダクル族は内蒙古に多く住む。蒙古族の「馬頭琴」が展示されてあつた。バイオリンのような弦楽器の柄の頭に馬の首がついている。馬頭琴の名はこれが由来するのであろう。馬の首の材質が何であろうか、実にテラテラと光つていて。チヨコレート色が照明に輝いて美しかつた。

ウイグル族は回鶻族とも云つた。回教（回回教）とはウイグルの宗教である。ウイグル族はウルムチの東方に住み食事は油であげたものを好む。ウイグルは文字を持っていて。ウイグル文字は蒙古文字が元である。満州文字が生まれたのはウイグル文字の次の段階である。現在のウイグル族はすべてイスラム教である。イスラム教は祈りの前と食事の前必ず手を清める。水差を使用し水を手に受けて洗い流す。水を入れ物にためて手を洗うと云う風習はない。

「忠誠なる旧トルフト部族英雄の王」  
と刻まれた銀印がある由を知る。見落したか展示して

## 新疆博物館

### 新疆玉石工場

一九六四年に創立された。従業員六十人で回族・ウイグル族・漢族の三民族で經營している。ガラスのショウケースに並んでいるのは金の工芸品、玉石の工芸品、人形、鳥獸、花、香爐等々で手のこんでいるせいもあるのだろうが何となく値が高いと云う感じである。金製品についてはその時々の國際価格にも関係すると思ふけれど……。元々金製品は安価なものではないからあたり前の値段なのかも知れない。

新疆は玉石の産地ではあるが特に美しいと思つたのは「ホータン」産出の白玉石である。なめらかで純白

で美しい。このホータンの白玉石は一年間の内、三ヶ月間だけ採集する事が許されていると云う。北京の故宫宮に使用されている白玉石はホータン産出である。製品の一部は国外に輸出している。

「黄金管理事務所」と云う看板のかかつて建物が目についた。金が相当量産出しているのだろう。モスク寺院のようなムード屋根の建物だつた。

金製品の出土品、クチャ王の銀の像があつた。ホータン王は死ぬと玉石の薄片をつないだ衣を着て棺に納められたと云う。

ウルムチに西域戸護がおかれた張騫が二回、部下が一回ここに来ている。漢代の文書がローラン故城、ミーラン故城から出土している。アスター古墳から出土した錦にブトウ文様が織られている。同じくアスター古

自治区に

いなかつたのか、もし展示されていたのなら残念な事をしたと思う。

ウルムチのじゅうたん工場は以前はウール生地の生産であったが、現在は大きい寸法のじゅうたんを製造している。柄はモスク寺院を中心で大きく出した赤糸を基本にした全くの西域の感じ百パーセント。

じゅうたん工場を見学してウルムチ空港に五時二十  
五分に着く。カシュガル行きの飛行機は六時四十分発である。カシュガルは交通の便が非常に悪い。まだ開放されていないところが多くあるらしい。鉄道もなく車の夜間運転は禁止されている。人の歩く道ぐらいはあるのだろうがスピードが最大限要求される現代、トコトコ歩いてなど居られない。一日一往復週二回の事で常に満席などの事である。飛行場の待合室はゴッタ返しであった。待合室の売店に「なつめ」の乾燥したもの、殻つきピーナッツ等が売られている。誰かが瓜の乾燥したものを持つて皆に配っていた。一つ頂いたが固くてかたくて私の歯には及びもつかない。多分砂糖水にでも漬けてやはらかくして食べるのではないかと思はれた。或いは、薄く削ってでも食べるのだろうか。

八時二十五分、中国最西の国境の町カシュガルに到着、時差とは云いながらまだ日が高く明るい。ホテルは「喀什賓館」。建物はトルファンのホテルとは違う別な異国情緒。全くイスラム教寺院を思はせる。トルファンでもこれが中国かと思ったのだが、カシュガルに来て全くその感が深い。箸で食事をしなければ中近東と云つても過言でない。この地方は昔ヤカド地方と云つた。ヤカドとはアラビア語で「光」と云う意味である。

夕食九時三十分、やっと夕方の気配を感じられるようになる。食堂は別棟で入口に「清真」の額がかけられている。イスラム教の寺院を「清真寺」と云う。食

事は大体今迄と似たようなものが出来たが一品だけ違つて油と香辛料の利いた「チャーハン」が出る。同行の先生が喜こんで食べて居られたが、米が不味いのか香辛料が私の舌に合はないのか大して美味とも思えず試食程度、「メン」も出たが汁は正油色のスープである。一体何であろうか、テーブルの一回何だと下馬評しながら食べてみる。まあまあ食べられる味、美味のうちにには入らない。少しなら何とか食べられると言ふものの大好物な食物だが私の口にも試食で結構。

夕食後隣の建物にウイグルの踊りを見に行く。子供達が踊っていた。子供達のあと娘達の踊りがあるのかも知れないが、子供達の踊り二、三曲を見て部屋に戻る。カシュガルのブトウ棚の下での民族舞踊と似たようなものだろうと思う。

入浴しようとして、風呂の溢れ水を調整する皿皿がまだ取りつけないのでそこだけボソンと穴になつておらず、栓をひねるとお湯は出るが穴の真上なので穴に半分流出してしまう。たまるより流出する方が多いくらい。浴槽にたまるには何時間もかかりそうである。やつと足だけ洗う。どのホテルも欠陥ホテルばかりで満足なのには行きあたらなかつた。まだまだこんな国境の町までには手が届かないのだろう。ましてカシュガルは開放したばかりだそなうだから。トイレの水洗は文句がなかつたが風呂は落第。その上お湯はうすい紅茶色をしていてた。

夜明けがおそく九時は函館の五時、完全に四時間は違つた。朝食九時三十分、昨夜のチャーハンを喜こんだ先生がチャーハンを頼んだが、ウエートレスは不思議そうな顔をしている。チャーハンと言つても通じないのだろう。テーブルが小さいので予備の椅子や床にも料理を盛った皿を置く。国民性とは云いながら苦笑せざるを得ない。土足なだけに一寸考えさせられた。

ホテルを出て間もなく「毛沢東」の大きな像を見る。銅ではないようだ。白っぽい感じである。今迄どの都市でも一度も見なかつた。かつて国内に沢山建つてたらしいが皆壊されたとの事である。カシュガルにまだ残つていて政策上らしい。外套を着た堂々たる像である。

英語→日本語はツーリストの添乗員が担当することになった。中国語の組、英語の組に別れる。私は中国語の組に入った。

カシュガルは漢・宋の時代は「疏勒國」と言った。

タクラマカン砂漠の最も西に位置しそ連・アフガニスタン・パキスタンに接する中国最西端のオアシスの町である。人口二〇万人、そのうちウイグル族が八十五パーセントを占める。十三の民族が住む。年間降雨量一〇〇ミリ、天山南路の西の基地である。川の水の赤いのはパミール高原の土や小石が流れ出るため赤いのだとの事である。ホテルの門を出ると溝があり赤い水が蕩々と流れ、溝の岸には直角にのびた二十メートルもあるというボブラがずっと向うまで続いている。この岸の並木ばかりでなく並木のボブラすべての根元から一・五メートル位まで幹に石灰がぬつてある。これは口が幹の皮を食べるので防護のためだと言う。歩いていて給水車を見た。皆バケツを持って水を受けていた。飲み水は自治区で配給しているらしい。流れを汲んでいる人を見たが泥水に近い。何に使用するのだろうかと首をかしげた。意外と簡単に濾過出来るのかも知れない。

カシュガル（喀什噶爾）  
カシュガルの案内人は中国語が出来ず英語だけとの事で、  
中国語から日本語に訳せる人は潘さん一人で、カシ

## ホジヤー一族の墓。香妃墓

アバ・ホジヤーはカシュガルにイスラム教王国を作った。このアバ・ホジヤーの墓や香妃の墓、並びに一族五代の王と七十五人の王族の墓が、巾三八メートル、高さ二八メートルのレンガと石の建物の中にある。この廟はウイグル人の建築技師が設計した。保存の目的である。ウイグルと漢は三〇〇年前より交渉を持ちウイグルはすばらしい文化を持つていた。

香妃は王の娘で時の皇帝（清の乾隆帝）に召されて都に行つたが、どうしても帝の意に従わなかつたので皇帝の母親に難詰され、自ら命を絶つたと伝えられている。香妃と言う名はその身体から常によい香りを放つたのでこの名があると言われる。遺体となつても香

りは失なわれる事はなかつたと言う。香妃が死してか

ら乗つて来たと言う興が置かれていた。

墓は青色を基調としたタイルで覆われ形はかまぼこ型、遺体は墓の下二メートルの地下に埋められている。かまぼこ型の墓（屋根と言つた方がふさわしい）は平面にペタンとかぶさつてある。この屋根が吾々の感覚で言う墓標にある。この建物（廟）の天井も青色のタイルが張りつめてあり、天井からの光線があたると淡い光があつて美しい。廟の真中の一番大きい墓はアバ・ホジヤーの墓で香妃の墓は右奥にあり小さい。香妃は現在骨だけである。当時は薬を入れて何年も保存したと伝えられる。

入口にアラビア文字で「人間は死ぬのだからどこで死んでも当然である」と書かれている。説明してくれた太ったオヂさんは中国語は大きな声なので高い天井にこだまして、隣りで通訳している潘さんと対照的に数倍の迫力がある。

ウイグルの習慣として娘が死んだら母のそば、息子が死んだら父のそば、出産が裸だから死ぬ時も裸との思想で白布一枚で遺体を包むだけ、副葬品はないとの事である。

ウイグルには男尊女卑の思想があり墓も夫は大きく

妻は小さく息子の墓と同じ位である。喪中は三年又は二年半と説明していた。

この廟のドームの屋根はみどりのタイルを張りそのままの上に小さな塔がある。この塔も屋根はドーム型、鐘楼との事である。この鐘楼から一本の柱が真すぐ空にのび尖頭にイスラム教のシンボル「三日月」がついている。注意をしないと判別出来ない位小さい。

かつて私は東京代々木上原にあつた回教寺院を参観した事がある。坂を登つていくと先づドームの真中から伸びる柱の上の大きな金の三日月が目を射る。坂を登るに従つて真夏の太陽（丁度夏だった）に輝く三日月とドーム屋根があらわれる。地形を利用したとは言え演出的には見事と云うほかはない。あの時の感激と詩情は今も忘れずに残っている。

鐘楼まで行くのにドームの屋根に階段がついている。何時に鳴らすのかはわからないが、この廟の四隅に小さなミナレットが建ち、このミナレットの上にも長いびた柱の上に三日月がついている。このミナレットは「エミンの塔」ほど紋様はついていないが。

裏庭に洋梨の木があり小さな実がついていた。ひまわりが咲いていたが花が大きき沢山の花がついている。この裏庭は一般人の墓地で王並びに王族を慕つてこの建物のまわりに墓を築いた。全部土で作られたかまぼこ型の墓。大きさは小ささまであるが、びつり広い土地に並んでるのは壯觀である。墓は地下二一三メートルの深さに掘り左右に穴が続いている。一基一家族、かまぼこ屋根は遺体を入れてから後作る。入口がなく空気穴だけが小さく上部にある。王のようにタイル張りでなくオール土だから作り直すと思えば崩してこね直しても一度かまぼこ屋根を作ればいい。最近はこの庭が狭くなつたので郊外に墓を作つてあるとの事であった。

この廟の隣りはかつてのイスラム教会の礼拝堂である。木柱に彫刻がしてある。創建時の色彩は美しかつたと想像する。大部分は剥落がひどいが残つてある彩は鮮やかであった。天井も彫刻してあり柱よりも

彩は残つてゐるが、色そのものは柱よりボケている。いづれも青色が基調の色彩である。

廟の前に小さな池があり小川が注いでいる。赤い水の川である。しかし赤い水が注いでいるのに池は濁つてない。パミール高原の土や小石は池に注ぐとすぐ沈没してしまうのではないだろうか。泥水をひやすくで汲んでいる老婆を見る。

イスラム教ではお祈りをする時には必ず水浴して身体を清めてから礼拝する。この池も現在水浴に使用されているとの事である。白いヒゲの男が三、四人、池の縁に腰を下していた。お祈りの時間待ちをしているのだろうか、それとも吾々が居るので居なくなるまで汲んでいる老婆を見る。

帰りのバスが門前に来る迄門を背景にして、説明したオヂさんや物めずらしげに集まつて来た附近の子供達を入れて写真をとる。説明のオヂさんに熱演を感謝してボールペンをあげる。大変喜こんで「謝々」をくり返していた。

機内でもらつた中国のアメや空港の待合室でもらつたピーナツ等を子供達にわけてやる。子供達は学年に達したのが半数以上、夏休みなので学令児が多いのかも知れないが靴をはいている子は十人に一人位のものである。脛まで泥で汚れた細い足のハダシである。赤ん坊を抱いて子守をしている女の子でもまだ小学校六年生になつたかどうか、多分親がバザールやあるいは綿島などで働いているのではないか、裸足の細い脛が砂ほこりで真黒になつてゐるのを見るとまだまだ貧しく、さいはてのカシュガルには中国の国力が十分届くには時間がかかるだろうと思った。

年間雨量一〇〇ミリという砂漠のオアシスで雨に遇う。ボソリボソリと降つて来たと思つたらいきなり雷鳴でバケツをひっくり返したように一度に降つて来た。スコールなのだろう。バスが来た時にはケロリと晴れてしまう。貴重な体験であった。門の前に売店があつたのでぞいて見る。果物と西瓜だけだった。水の代りと言うところか。

## 幼稚園

## い　な　づ　ま

カシユガルの民族幼稚園と言う。漢民族以外の小數民族の子供達を育成する幼稚園である。教育制度は中央と同じで一九五八年に創立された。先生は六十人。子供は四〇〇人で、朝預け夜両親が迎えに来る。三才（六才迄の入園である。授業は国語、体育等七科目、国の援助があるので費用は安く月三元（この時日本円四十四円が一元であつた）。年三六元である。映画なども見る。子供は夏休みだが親が見れない家の子供はあづかる。夏休みは九月五日迄、希望すれば誰でも入れる。踊りをする子は一組三十人のクラスにして一クラスの中で素養のある子を選んで別に指導する。

子供達の踊りが始まった。十曲位おどり最後は日本の「四季の歌」となる。昨夜のステージと同じである。「四季の歌」はトルファンの野外舞台でも歌つていたが歌いやすいのだろうか、最後に歓迎の挨拶をした子は化粧をしていた。鼻すじに白くおしろいを塗つていた。幼稚園児にしては大きい子と思ったが、本当に学令前なのだろうか。

弾いていたマンドリンの親分のような柄の長い楽器は「ワラップ」（熱瓦甫）と言う五弦の楽器で、胴に蛇の皮が張つてあつた。

各教室を見て廻る。先生一人に子供は十二～三人と云うクラスもあり行届いた指導である。子供達の製作品を展示してあつた。積木などは日本と同じで木片にカラフルな色を塗るだけだから世界各国共通な玩具なのだと思う。面白いと思ったのはウイグル人の子供のベッドである。落ちないようにベットをひもでしばるようになつてある。ユニークなそして実用的なアイデアである。

踊りをおどつてくれた部屋の外は中庭になつていてお休みしている子供達なのか四・五人が吾々の帰るのを見ていた。

◇

◇

**エイティガール寺院（清心寺）**

一四四八年に始めて基礎が作られる。カシユガル王がイスラム教を広め一九五六年に現在の規模となる。昔は大学の役目をしていた。西域最大のモスクで七千人の信者が礼拝出来る。

イスラム教は一日五回の礼拝を行う。七時、十一時、十五時、十九時、二十三時の五回で一回約五十分位、指導者とかリーダーなどはなく参拝は自由、男性だけが寺院に来て礼拝する事が出来る。女性は家に居て祈る。寺院には来られないとのことであった。女人禁制である。

長さ

一六〇メートル、巾四・五メートル位の廊下（

中心の建物を取りまく板敷）に竹を編んだ敷物の上にいい加減に疲れたジユウたんを敷いた上に一列、二列とメツカの方を向いて並ぶ。男ばかりで立ち上つて頭を垂れ膝をかがめて頭を下げそれから坐る。坐ると言つても膝をそろえて頭を床につける。当然お尻が上のので後からズラット並んだ處は壯觀である。後で聞いたところによると、一日五回キチンと戒律通りにお祈りするのは職のない人達だけで、職場にあつては仕事優先で戒律通り五回など出来ないと話していた。どうりで見た人達は揃つて皆白ヒゲの老人ばかりであった。

イスラム教ではラマダンと言つて絶食の時期がある。絶食と言つても日の出から日没まで一切の飲食を絶つ。これが一ヶ月続くと言う。絶食は大人だけで子供は参加しない。このラマダンが終るとおまつりをする。それが一番にぎやかであるとの事である。このおまつりは四日間続き、友人の家を廻つたり、来た友人を歓迎したりする。カシユガル地区には二〇〇位のイスラム寺院があるとの事である。塔の上の鐘を朝食の前と寝る前に鳴らす。今朝七時頃聞いたが非常に澄んだ音色だつた。

露店ではなく建物の一部だつたり建物からの差し掛けの店だつたり、又長屋のように並んでいたり少し広い土間のようなところに左右に店を持つたりさまざまである。店はいづれも半坪、一坪位、金銀の細工の特技があると言われているが、本当に細工道具を廻りに置いて見ている前で小さな槌や、やつとこを器用にあやつつてトントンカチカチと指輪やイヤリングを作つている。デザインも手が混んでいて見事である。赤や青の玉を入れたりしているので一寸手にしてみたが玉は全部ガラス玉だつた。

次つぎとのぞいて歩く。行つても行つても同じ店ばかりで少々あきて來た。扱う品物ごとにかたまつていろいろ細工物のブロック、衣類や食品、それに木箱に金線を打ちつけて紋様を出す店ばかりのブロックなど切れ目なくつづいている。金線は真鍮だらうと思う。銀細工は本物らしいが金細工も高価なものは本物の金を使用しているらしい。

食料品店で見た香辛料の種類の多いのに驚く。木の実草の実のほか石ころみたいなものもある。まさか石ではないと思うが、白あり、黒あり赤ありでカラフルである。名前を知りたいと思ったがバザールは自由行動なので聞く事が出来ない。石鹼だと思ったものに吾々の戦後すぐのザラザラと同じものが並んでいた。

路上には生活必需品ばかりでなく理髪店や歯医者等が並んでいる。理髪店は四隅の棒の上にテント一枚載せた店、どこやの道具と椅子があるだけで鏡はない。お客様は白布はかけていた。歯医者は家の中で治療をしていたが看板がおもしろい。人間の歯を書いたのが軒先にぶらさがっている。「歯科医」と看板を出して読めなければどうしようもないのだから、ソ連のハバロフスクの店のように絵を画く事が一番間違いがない。あちこちにチャドルをかぶつた女性を見る。そばに寄つてそれとなく見ると太い糸で粗く織つてある布（ネット）である。何んとなく重そうな感じだが目があらからそれ程でもないのかも知れない。色は路上で

バザールに行く

エイティガール寺院の裏はバザールになつており、

見たのはオール茶色だったので一瞬魚網を感じさせた。チャドルをかぶっていない人は決まってスカーフをかぶっている。翌日ウイグル人の家を訪問した時、その家のおばあさんは水色のチャドルをかぶっていた。イスラム教の戒律として女性は他人の前では顔をかくす事になつてゐると言うから、外出時と室内とではかぶるチャドルは違うのかも知れない。

二階建の簡易デパートがあり入つてみる。特産の綿製品があり孫達に白地に色糸のししゅうを施したグラウスを買う。いつまでも着ないのでどうしたのかと聞いたら首明きが小さくて吾が孫達の頭が入らないと言う。キルギス族のししゅうでとても可愛かつたのだが残念だった。

このデパートにウイグル人の食器が売つてあつた。ナイフを買った人が居た。私もほしかつたので一度は手にしたのだが止めた。飛行機の検査でひつかかると思つたら案の定ひつかつた人が居た。私は髪の乱れを整えるスプレーがひつかつた。何もない筈と思つてすましていたがピーピーなるからしづぶ中をあけざるを得なかつた。

蘭州のバザールに行つた時は道路に大きな盤を置いて碁を打つてゐる人を見た。手のひらに二つ持つたら一ぱいという位の大きな碁石である。石の数が少ないから日本のルールと違うのだろうか。中国人で日本で段位を取つた人が居たと思うが、カシュガルでは全然目につかない。ウイグル人と中国人とは遊びも趣味も異質のものなのだと思う。

午後出発の時吾々の乗つたバスが交通事故を起こす。加害者などの事で皆心配したが大した事もなく交通警察が来て処理しバスが動き出した。広い道で日本のよううに車がつづいているわけでもないのに接触事故がおきるとは、技術がまずいのか起きる時には仕方のない事なのかと変な納得をしていた。

驚いた事の一つにこのカシュガルで日本の「佐川急便」のマークのついたトラックを見る。江戸時代の「飛脚」の絵のあるマークである。ここ迄来て運送をし

ているわけでもないしと聞いたら中古車の輸入で、特別塗り替える事もなくそのまま使用しているとの事であつた。日本の運送屋が来ているなら旅行も持つて歩かなくてラクなのだがと話し合つた事だつた。

### 三 仙 洞

バスは砂礫の河底に停止。河巾一〇〇メートル、かつて水は流れていたが洪水によつて流域の民家が流出しその後人はこの地に来なくなつたと言う。この河の水源は今はなく大雨以外に水は流れない。タクラマカン砂漠で洪水がおきる程の雨が降り、民家が流出する程の洪水がおきると不思議な気がする。砂礫の河底一面に砂漠の「三草」と言われるタマリスク、積々草、ラクダ草が生えている。

河岸にそそり立つ絶壁の上部に三つの洞窟の入口があんんでいるのが見える。三仙洞である。昔はこんなに高くなかったのではないか、洪水と共に河底も土地も削りとられて絶壁が次第に高くなつたのではないだろか、現在吾々が見上げていて足場をどうしてかけたのかと考へる。ガイドは中国の考古学者が絶壁の上からロープで吊り下がつて洞窟の調査をしたと言う。

洞窟は仏画がかかれ前室と後室に別れている由、

高さ四メートル、巾三メートルで紀元前二世紀一後三世紀ごろに書かれたとガイドブックにある。敦煌莫高窟より一〇〇年も早く画かれたといふ。タクラマカン砂漠の西端で一番印度に近く仏教伝播も一番早かつたのだろう、唐時代の玄奘も時の都長安からこの地を通つて印度に行つたのだから。イスラム教が入つて仏教が破壊される迄のカシュガルは仏教国だった。三つの洞窟は中国では最も西にあり最も古い仏教遺跡である。

イギリスの探險家スタンが壁画を持ち出したと言ふ。日本の大谷探險隊もここに来た。真中の窟に落書きがあるという。この地区の北側はソ連と隣接しており道路もある。地元の人々は定期的にソ連と貿易をしてゐるが国としての交流はないと言っていた。

吾々が見上げてゐる時に中国人の男女(はなれい)ので年齢はわからないが若い人達ではないかと思われる)を満載した小型トラックが来る。はしごをつなげて手をつなぐ事も出来ない。しばらくウロウロして居たが戻つてしまつた。はしごの連中も二三人が挑戦したようだが結局だめ、吾々は時間が来てバスに乗つたがその後どうなつたのかと思う。

他の道から絶壁の上にのぼつてきたが洞窟の上で立往生、吊り下げるにも吊り下げるにも素手で一人では何も出来ない。はしごの上の人の間隔がありすぎて手をつなぐ事も出来ない。しばらくウロウロして居たが戻つてしまつた。はしごの連中も二三人が挑戦したようだが結局だめ、吾々は時間が来てバスに乗つたがその後どうなつたのかと思う。

観光客のために開放を命じられている家の様なのが、ウイグル人の家庭を見せてくれるとの事で出かけれる。メメツチさんと言ひ五十五才、八人家族の御主人で水力発電所につとめている。メメツチさんの家は三代の家族が住む。ウイグル人は御客様が来てくれる事は非常な名誉であるとの事である。中国語組と英語組とが別々の家庭を参觀したから開放してくれる家がほかにもあるのだろう。

御馳走が出来る。その前にメメツチさんが大きな銅製の水差とその水をうけるつぼとバスタオルを持って来て、一人一人水差の水をかけて手を清めさせた。それから布を敷き更にその上に白布を重ねて食物を並べる。大小のナン、穴のあいたナン、細い紐のようなの、紙のように薄くしたの、油であげたナン、それに氷砂糖バターあめのようなもの、ビスケット、砂糖のかかつたお菓子、ハチミツ、砂糖を加工したもの、桃、すもも、西瓜、ミニ瓜等沢山並べた。紐のように細くしたナンは美味だつた。昼食後すぐの訪問なのでとても食べられない。全く二~三の試食程度に終わる。メメツチさんはどんどん食べててくれなくて申しわけないと言つていた。ナンは常食で日持ちがいいので一週間分

位一度に作るという。メメツさんの家に入った時にすぐ左の室に母親が居た。やはり布を拝げて食物を並べていたが、水色のつきしなかつたが、食事をする時はチャドルをあげて食べるのだろう。一々チャドルの下から口に運ぶわけではないのだろうと思う。吾々が来たから顔をかくしたのだろう。

冬の暖房はオンドルで燃料は石炭である。月収は三〇〇元、四〇〇元位になると上級となる。この地方は内地より五〇元ぐらい高い収入である。息子は一五〇元と言っていたが息子さんの職業はききもらした。テレビの普及はそれ程でもない。吾家のはカラードであると話していた。この近所ではテレビは四軒より持っていない。日本の放送は時々見るとの事、日本に対しての印象については「あまり知らない。中国政府との関係が良さそうだ」という位であると言つていた。

朝七時に起床、十時に出勤して山に行き水路の点検をする。休みは決つてない。妻の仕事は同じ職場につとめている。観光客が多くなつたのでその点についてはどんどん来の方が多いと思う。物も豊富になつたし道路も良くなつた。これからは外国人が来るばかりでなく自分達も外国に行つてみたい。メツカに行つて來た事が一番うれしい。車でパキスタン迄行つてそれから飛行機で行つたと話していた。コーランの壁掛けが下つていたがメツカに行つた時のお土産なのだろう、メツチさんの宝物かも知れない。

この家は建つてから一〇〇年以上経つて居り妻の家である。母親は八十才になっているがいつ建てたかわからないと言う。家族が一番多かつた時は十五人であったと話していた。メツチさんは丸顔小ぶりの温厚そうな人である。

この家は二階建である。トイレも二階という事で家を出てから二階に上つて見る。階段は外で直接二階に上れるようになつていて。ウイグル人は一室で寝食・応接などすべてを行うのだろうか。二階が息子さんの

住居らしいから室数はなさそうだ。日本のように押入がないから財産はオープンに積み重ねてある。バザールで見た金線の張つた箱がいくつも積み重ねてあつた。メツチさんの家は表通りから小路に入った中にあり案内人がいなければ道に迷う。表通りはこまかい土ほこりが舞つていたが小路の土は踏みかたまつていた。

ホテルに帰る途中バスの窓から公園の池の水耕作業を見る。赤い水を土の上にどんどん流していた。

午後十時〇五分、ウルムチ空港着、前回と同じホテルに着く。いよいよ帰国途である。今日は充実した一日であつたとベッドの中で今日一日の行動を思い出していた。

#### 南山牧場（ウルムチ）

ウルムチから北京にとぶ飛行機の都合で一日空いてしまい予定に入つていなかつた南山牧場に行く。南山牧場は二二〇〇メートルの高さにある。南山にはカザフ族（ハザック族）のパオが一〇〇以上も広い牧場に点々と白い模様を画く。バスで小一時間の処にある。

通訳の案内ではパオの一つに入る。意外と広かつた。

ストーブがあつて北海道のルンペンストーブに似ているが構造はわからない。じゅうたんが敷いてあり坐らしてもらう。「馬乳茶」？が出たが一口で遠慮、藩さんは「多分お口に合わないと思うが全部飲まなくてはいけない」と云つていたがとてもとも…。

カザフ族は天山の北側に多く住み新疆自治区には一三〇〇万人が住む。宗教はイスラム教で宗教の教えに従つて遊牧していくても一日五回のお祈りをする。遊牧だからお寺は持たない。

世界の三大宗教・仏教・キリスト教・イスラム教のうちイスラム教の規律が最もきびしい。イスラム教は二つの派に別れ十三の少数民族のうち、シヤア派はカ

ザフ族のみが信仰し、スミ派は残り十二の民族が信仰する。カザフ族は文化が進みカザフ文字と云われる文字を持っている。

このパオの御主人は四十才、妻三十八才、しかしどちらも十才以上地味に見える。特に化粧もなく赤い頬の奥さんは健康そのものと云う感じである。子供は十五人の女の子、九才の男の子、四才の子と三人、一家族五人である。このパオの中に五人が生活するにはまああの広さである。上の子供二人は居たが三番目の子が見えないので聞くと「おひる寝」との事、はてどこに寝ているのか全くわからない。ウイグル人の家のようになつてある箱があつたので、その箱のかげにでも寝ているのだろうか。

子供の教育は先生が一軒づつ訪問して家庭教師の形を取るケースと、町に通つて来るケースと二通りあると云う。このパオの子供達は週の土曜、日曜日に通つて来てくれる先生に三人一緒に学んでいる。教育のやり方は中国語ではなくカザフ語で行う。

日常の生活については全く野菜を食べないので羊を一匹必ず一家で食べる。定期的にバザールに出て羊と日用品を交換する。遊牧は冬みどりがなくなると集落にこもる。冬の間は夏に刈りためた牧草を与える。刈取りは手刈である。

自治区の面積は九六〇万平方キロで地形は山が多く中央に天山があり、南はチベット青海省につづき北はアルタイ山脈があつてソ連に接する。冬は雪が五十七センチも積る時がある。五月一日に山に来て帰るのは九月十五日、その頃雪が降る。今八月上旬だからあと一ヶ月位で急速に冬がやつて来る事になる。夏冬が長く春秋は一瞬のうちに過ぎてしまうのだろうと思う。カザフ族は天山の北側に多く住み新疆自治区には一三〇〇万人が住む。宗教はイスラム教で宗教の教えに行つた先、そして冬は集落に土で出来た家を持つ。中國政府の指導である。バスの途中、向うの丘の上に土の家が並んでいたのを見た。干草をどこに貯蔵するのか北海道のサイロに類するものは見えなかつたから、多分室内に積んで置くだけなのだろう。

この家は馬七頭、羊四十頭、牛五頭を持つている。しかし丘にはここ家のものばかりでなく馬は勿論、羊も牛も見えないので、どこにいるのかと聞いたたら林の向うにいるとの事であつた。トイレはどこかとの質問に林の中に作つてあるとの事、その林がこのパオより結構の距離がある。子供が夜に使用するには大変だろうと思つた。羊が増えたら売るが家畜の値段は羊が一番高く一頭九十元である。ヤギはそれに比して安い。羊は毛があるので高いのである。ラクダは一頭四五〇元、ロバは安く日本円に換算して八十円一・一五〇円である。ロバを買ってお土産を積んだらどうかと皆で笑い話をした。

パオの内の出産の時は男は外へ出される。手伝いの人が男の子が生まれたと云うと鉄砲を三発うつて中に入る。女の子ならまだまつてパオの中に入り入口に簾を置く。将来よい主婦になるようとの事である。掛けある壁かけのししゅうは女の手仕事だと話していた。子供に対する希望を聞くと両親は大学にやつて先生か医者にしたいと云う。子供にインタビューをしたら女の子は小さな店を持ちたいと話していた。男の子は外に行つてしまいインタビューアーは出来なかつた。カザフ族は年四回、男が女に対して何をしても女が抵抗出来ない時があり、又逆に女が男に対して何をしても男が抵抗出来ない時があるので、逃げるのが上策であると活していたがカザフ族のおまつりでもあるのだろう。

パオの外で家族と一緒に写真を撮つたが子供がいると知つていれば何かお菓子でも持参すればよかつたと思つた。

この牧場の奥に滝があり小公園のような観光地になっている。沢山の人々が遊んでいた。後で聞いたら少数民族の体育祭がこの地方にあつたとの事だからそれで観光客が多いのである。藩さんは外国の要人が来てゐるらしいと云つていたが、バスに乗る時トルコの大統領との事であった。どうりで建物の前に黒塗りの大

きな乗用車が数台並んでいた。バスも沢山並んでおり丘の下の道端で「清心」と看板をかけたテント作りの食堂が並んでいた。

自由行動になつたのでプラプラ丘を歩く。ハザックの娘達が赤い服の乗馬靴、鳥の毛のついた赤い帽子をかぶつて馬の足どりも軽く一騎・三騎とやつて来た。どの娘もにこにこと愛敬のある笑顔である。馬から降りたのを機に一緒にカメラに納まる。同行の先生が「笑顔は世界の言葉」と云つたが味の深い言葉である。

丘でマージャンをして来た中国人の中に入つてマージャンをして来た先生（ルールは日本の同じとの事）丘の草に寝ころんで青空に浮く雲と話をして来た先生別なパオを見学して来た人などバスに乗る迄ゆっくり時間を使はんでいた。

### 紅山公園

帰途紅山公園に寄る。塔とあづまやがあるだけである。ここはウルムチの真中に当りもと「竜山」と云つたが一七七七年、清の皇帝がウルムチに害を及ぼすといけないと云つて塔を建てたと云う。塔の中には何もまつてではないが時間ががあるので、皆向うの丘にある塔の方へ行つたが、私はバスのそばのあづまやで休んでいた。

「熱烈歓迎」の赤幕があづまやに掲げるところだつたが、少数民族の体育祭はこれから始まるのだろうか。新婚さんらしい人がいてカメラを持ってこちらに笑顔をむけているのでシャッターを切つてあげる。「熱烈大喜」であった。

早朝まだ暗いうちに朝食をすまし北京に出発の為荷物をまとめ空港行きのバスに乗る。空港は相変わらず混んでいる。母娘の泣き別れの情景を見る。人情はどこ

の国民も皆同じ、何となくシユンとしてその娘がゲイトをくぐるのを見送つていた。

九時二十五分、一九八人乗りの飛行機は滑走路を走り出した。一時間程して右側の窓に雪の祈連山脈が見えて来る。夏の陽にキラキラ光つて美しい。しばらく帽子をかぶつて馬の足どりも軽く一騎・三騎とやつて来た。

丘でマージャンをしていた中国人の中に入つてマージャンをして来た先生（ルールは日本の同じとの事）丘の草に寝ころんで青空に浮く雲と話をして来た先生別なパオを見学して来た人などバスに乗る迄ゆっくり時間を使はんでいた。

十一時、機内食に点心が出る。中国の点心は千種類以上もあるとの事だからこの小函の中にはほんの一部である。十一時四十分、黄土色の細長いものが見えて来る。「黄河」だ。機内放送は北京着の指示である。十二時二十五分北京空港に着いた。

北京の空港から市内に入る迄の両側はアカシヤ・ボプラ・カナダボプラの並木が三十キロづづく。北京は東は海・西と北は山にささえぎられ南が平野で広がる。気候は乾燥地帯であると云う。人口九二三万。昔の城壁を壊して立体交通の道路を作つたと云う。北京も急速に近代化をしている。

昼食は民間人経営の食堂、部屋の壁一面に書画の軸が掛けられ高価な値段がつけられている。すべて名のある人達の作品であるとの事、中には北京大学の教授の作品もあるとの事であったが、蘭州で見た無名の人達が画いた馬や書の方が私には迫力があると思われた。

故宮は人が群れていた。かつて二回目の訪中の時故宮と故宮内の博物館を見学したが、今回は保和殿の博物館は見学に要する時間がないとガイドは簡単にすましてしまう。前回象牙の敷物を見たので皆に宣伝していくので博物館の見学が出来なくて残念だったと思う。私ももう一度見たいとのしみにていたのだったが。

故宮は清の三代目の皇帝が作り二十一人の歴代皇帝が住む。東西七五〇メートル、室数九〇〇〇以上あると云う。先頭がどんどん行くので妹を呼び止めて「漏刻台」（水時計）の建物を説明する。この建物は大

て大きくなないのでうつかりすると通り過ぎてしまう。四・五人の先生方が戻つて来て入口から中をのぞいていた。

天安門の広場は前回と逆方向にバスが止つたのでイメージが違う。前は「人民英雄記念碑」を遠くに見たが今はすぐ目の前である。「中國銀行」の前に行って見る。日本銀行本店の莊重さに比して軽やかな趣である。広場は前も「広いナア」と思ったが今回も同じく「広いナア」の一語である。年一回の全国民の大会に四十万人もの人がこの広場に集まると云うが、長時間の御手洗をどうするのかと云う話題が起きた事がある。広場のコンクリートを起こす下に壺があつてそこで用を済ますと聞いたので、今回注意して見たら本当に一人の広さのゴバンのコンクリートに番号がついていて手をかけられる回みもあつた。ペツタリのコンクリート流しの広場ではない。あの話は本当だったのだと確認した次第。

小休憩をしたところに売店があり妹が墨を買う。中国も国営から民間経済に移行しつつあるので、少しづつ国営とは違う顔がでている。一ヶ二十五元の墨を持つてレヂえ行つた女の子が戻つて来た。もう一ヶ加えると三十云でよいからどうかと云う。成程「薄利多売」の見本である。買う方も敗けては居ず差額は私が払うから買ってと若い先生が云う。「貴女だけが得するわ」とゴソゴソ相談していたが二ヶ三十元で買物を済ます。若い人達ははつきりしていると眺めていた。

西瓜のサービスをうけたが西瓜は沙漠に限る。西瓜は名の通り「西」で食べるのが一番美味。

今回の旅は時々つまづきが出る。夕食は明日は日本なのでお別れ会となり有名な「ペキンダック」を食べる事になつていたらしく、申込をしなかつたのか受け取れる方が忘れたのか、テーブルに着く迄しばらく待たされる。部屋はさすが首都の料亭だけあって調度品は螺鈿のつい立、飾り花びん、置物等一級品が並ぶ。ウ

エートレスは調度品に比して義務的である。

団長の先生の挨拶あと食事が始まる。ダックとはあひのこと、丸ごと出るのかと思つたらむし焼にしたものをおぼくそぎ切りにして出て来た。このそぎ切りの肉片の上に五センチ位の長ネギ（日本のネギと同じ）と甘味噌をのせ薄切りの肉を卷いて食べる。一口では大変、肉は硬くはないが長ネギは噛み切るのに大変だつた。要領よくやらないと中に入れた味噌がはみ出してしまう。「ペキンドック」と云つて名物料理ではあるが上品に食べられない料理である。皿と箸を使用して品よくなどと気どつては食べられない。手のひらに肉をのせ長ネギと味噌をのせてクルクルと巻き、肉がハジけないよう押えて食べる。野性的に食べた方が本当の味があるのかも知れない。私の舌は可もなし、不可もなしの評点である。

この日のホテルが大変だった。十時ごろになつても場所がどこかわからない。あちらで開き、こちらでたづねてやつと古ぼけた家の前でバスが止る。ヤレヤレと降りたら違うと云つて又乗り結局郊外（城郭の外）の新築はいいが都心から相当はなれた所だった。荷物を部屋に入れると早々にベッドにもぐり込む。「つかれた」と思う。明日は帰国と云う安堵感もあつて疲れが倍増したのかも知れない。又ソロ／＼私のスタミナも底をついて来たのかも知れない。

北京の観光写真に必ず掲載される建物である。高さ三八メートル、直徑三十メートルの円形の木造建築で

円形の屋根が三層になつていて、内部は梁や釘を一本も使用せず、四本の柱が天井迄とどきこの柱は左から「春夏秋冬」をあらはすと云う。十二本の赤い柱は一年十二ヶ月をあらはし、三層の屋根の青色は神をあらはし中の黄色は皇帝、下のみどりは庶民をあらはすと云う。この建物の真中の壇に天の神をまつり一月十五日に皇帝がその年の五穀豊穣と国民の平和を天の神に祈念する。天壇の名称もこれが由縁なのだろう。

天壇は文献によれば前漢の成帝（前二三年）始めて歴代の皇帝がこれを繼承し、その時の国都を作つた。「明の太祖（一四二〇）の時に北京遷都に伴つて北京に「大享殿」を築く。一八八九年に落雷で焼け、後再建された。「明」滅亡後「清」はこの天壇をそのまま利用し、一七四九年（乾隆帝十四年）に「大享殿」を「祈年殿」と改称し大拡張して現在に至つてはいる。

建物を見る為石の段をのばる。石段の石柱は竜と鳳凰がからみあつてゐる図案である。この天壇（普通一般に天壇と呼ばれているは本当は祈年殿）のある地域は周囲六キロもありこの祈年殿の外「皇穹宇」「圓丘」と云う二つの建物が附属する。「圓丘」と云う建物は皇帝が冬至の日に天下の統一と太平を天帝に報告し、同時にその威光を万民に示した処と云う。

時間的に「祈年殿」のみの見学に終つたが「祈年殿」以外も観光出来るのかどうかガイドも何も云はなかつた。

骨董品店からお財布をはたいて買物をした先生がいる。少し不足だったが店の人があるだけでいいと云つたので、ティッシュを一ヶおいて買ったと云つて西安のそばにある「奏の始皇帝の兵馬俑」の模像品である。西安の「兵馬坑」の売店が扱つてゐるらしい。

集合時間が迫り戻つたがバス迄しばらく歩いたから



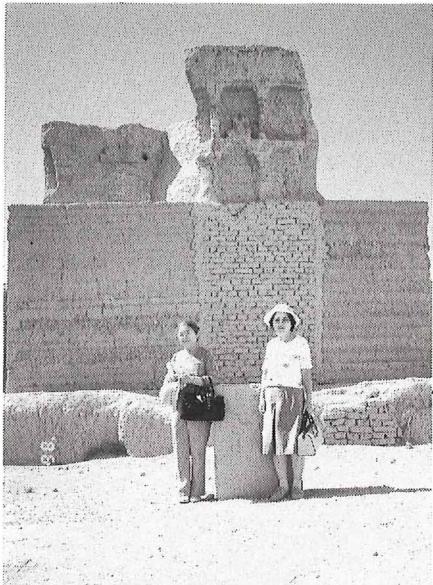
ハザックの娘

## 紀行文の中から

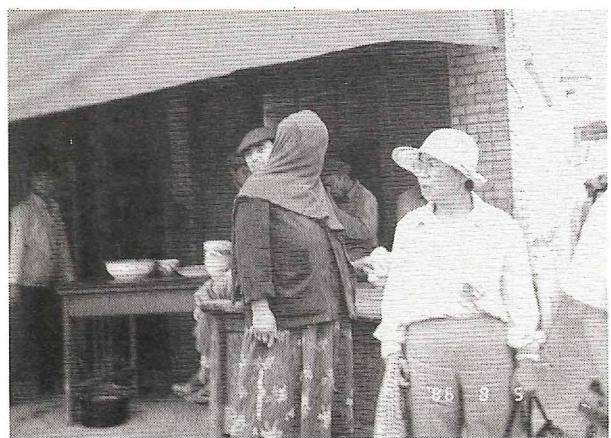
北京から成田え直行、各自の荷物を受取りさよならをして出口で又会つたり、羽田で又さよならをしたりしてホテルに落着く。日本の空気に心ゆく迄触れる。白いごはんに味噌汁、やっぱりこれが一番いいと思つた。



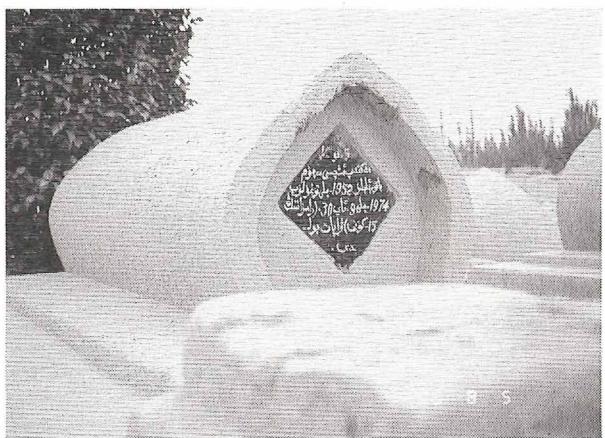
(完)



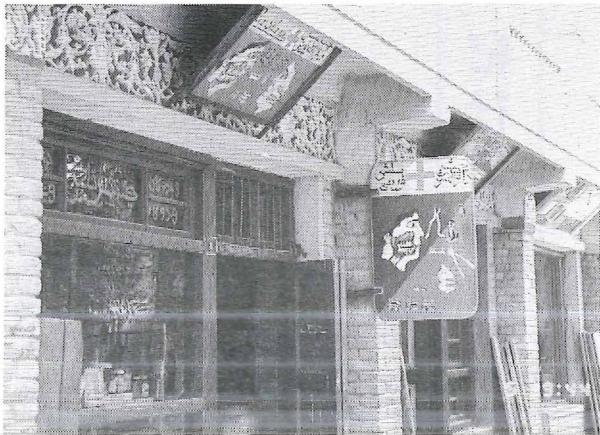
交河故城



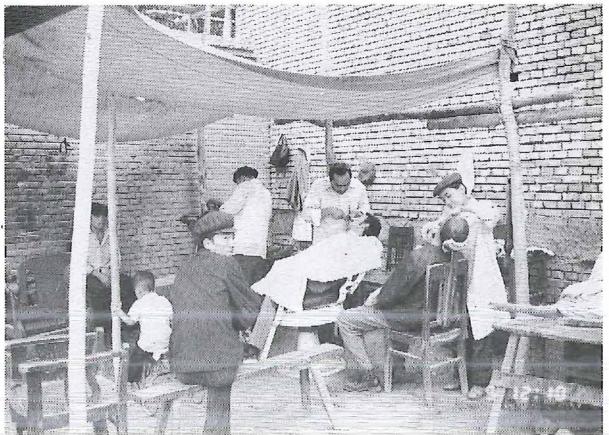
チャドルの女



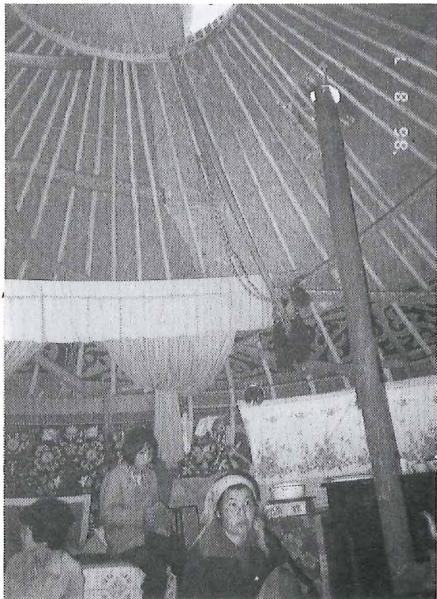
ウイグル一般人の墓



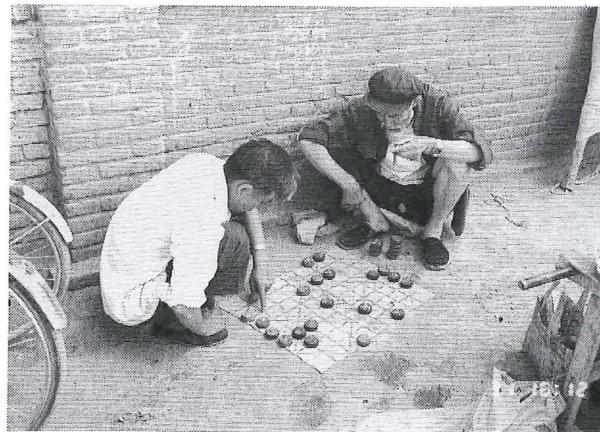
路上点景（歯医者）



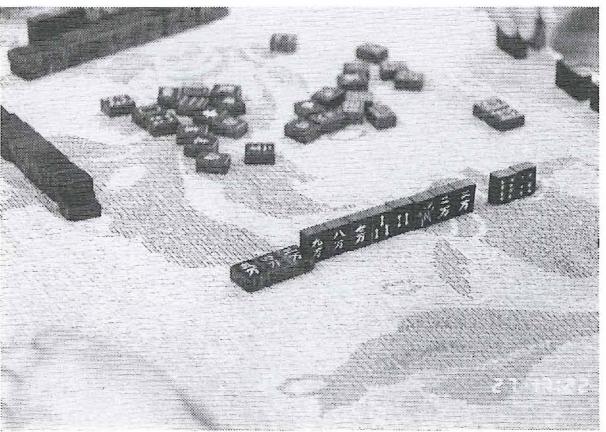
路上点景（床屋）



パオの天井



路上点景（路上の囲碁）



路上点景（中国のマージャン）